英文内容理解に及ぼす音読の影響―リーディングにおける Warm-up Effect 検証

阿久津仁史
文京区立第八中学校
The eighth Junior High School, Bunkyo-ku, Tokyo

鈴木政浩
西武文理大学
Seibu Bunri University

兼子真季
本郷台中学校
Hongodai Junior High School, Bunkyo-ku, Tokyo

Key words：音読　Warm-up effect　英文内容理解

外国語教育において音読はどのような効果をもたらすのだろうか。この疑問に対して、実証的な答えは数少ない。阿久津・鈴木・飯野(2005)は Listening comprehension に対する英語による音読の Warm-up effect（準備運動効果）を明らかにした。これは、pre-test によって等質性を確認した中学校と高校のクラスで、既習英文の音声を聞くだけの統制群と、モデル音声に従って音読した実験群との間で、直後に実施したリスニングテストの結果が、実験群の得点が有意に高かった、というものである。その理由として、音読によって脳内の言語情報処理、特にワーキングメモリの音韻ループの働きが活性化されたのではないかとの考察に到った。ワーキングメモリは Baddeley (2000)によると、視空間スケッチパッド、音韻ループ、エピソードバファの３つの機能を中央実行系が統括するとされる。この研究から、音読が文字を音声化する活動であることから、主として音声に関わる技能であるリスニングと音読との関係が明らかになった。

本研究では、英文内容理解の直前に音読練習をした場合にどのような影響があるかを検証した。ワーキングメモリの視点からは、視空間スケッチバッドが担当すると考えられる文字情報の処理にどのような影響を及ぼすかの検証となる。ワーキングメモリには３部門による一種のモジュール性があるとはいえ、瞬時に行われる言語情報の処理という点では、中央実行系の注意配分により、協同的に機能していると考えられる。

また、黙読の際には、心内音読(subvocalization)が作用しており、内容理解の前に一度音声化しているという指摘もある。ここから内容理解の能力と関係が深いと類推することが可能であり、そのため、音読に習熟することは、英文内容理解にもプラスの影響を及ぼすと考えることができる。

以上の点を踏まえて、本研究では、リーディングの内容理解に対して、音読がどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることを目的とする。特にリスニングにおけるのと同様、Reading comprehension テストの前に音読に取り組むことで、リーディング能力が活性化されるかどうか、そして、それは、リスニングに対する影響と同じような Warm-up effect があるかどうかを検証する。